ふぞく新聞

5月20日(金)

Vol. 1
(Vol.127)

さじ加減とは・・・

最近色々なことに対して感じることは、どうしてこんなに極端なのだろうか?」です。

特に今回の東日本大震災の報道のあり方は、僕にとってはその典型例でした。阪神大震災から学んだことは、風化させないことです。一時期だけ支援すればよいのではなく、長期的に行うことがとても大切なのです。極端な報道だと人は錯覚を起こします。少しずつでも長く続けることで力となることも多々あるのです。(勿論瞬間的な大きな力の必要性も感じています・・・) 『教育面でいうと、**偏差値教育とゆとり教育**』が極端な印象を受けました。明確に示そうとし過ぎて、極端になっている気がします。単純明快は確かにすっきりしますが、子育てや教育はそんなものではないのです。

子ども達にどのように接したらより良いのでしょうか?

一生懸命になればなるほど、答えを早く求めたくなるし、出たくなるものです。その気持ちは、良く分かります。

保護者の方に子ども達のことでの悩み等を相談された場合、具体的にどうすれば良いのかを伝えていこうとは思っていますが、実は、クイズや算数の問題のようにはいかないことも同時に伝えていかなくはいけないと思っっています。

時間をかけて子ども達と一緒に考える、悩むことは実は悪いことばかりではないのです。その中で、その子の特徴が少しずつ感覚的に分かってくるのです。それは、何度も何度も経験を重ねたこと(＝その子と関わったこと)で身に付く『さじ加減』だと僕は考えています。

独り言

今年度も『ふぞく新聞』を書かせて頂きます。

『ふぞく新聞』って何?と思われる方、それは、年数は重ねたものの、子ども達の助けを常に借りながら日々保育をしている幼稚園園長が、子ども達と遊び、過ごさせてもらった中で感じたことを思うがままに書いたものです。

当園の方針は『子ども達の遊びを応援する幼稚園』です。その応援方法の一つとして、この『ふぞく新聞』を通して子ども達の気持ち・言い分・心等々を父母の方に伝えていきたいと思っっています。勿論これらが全て正しいわけではありません。でも少しほんの少しでもいい頭の片隅にという願いもあります。 柿原勝

ふぞく新聞

6月10日(金)

Vol. 2

(Vol.128)

段階を踏まえる

さくらんぼクラブで平均台を出して遊んでいた時のことです。その平均台は、小さな平均台で大人の視点でみたら、**「こんな小さいの、楽しいのかしら？」**といった感じのものです。

その平均台に三歳児のお友達がチャレンジしてきました。僕の手を持って、最後まで渡りきりました。するとそれを見ていた二歳児のお友達も真似をして渡り始めたのです。二歳児のお友達が渡った後、お母さん方が大きな拍手をしてくれました。すると次々にお友達が集まってきて、その平均台を渡り始めたのです。

一番最初にチャレンジした三歳児のお友達は、今度は僕の手を持たないで渡ろうとし始めました。二歳児のお友達は、何度か行う内に余裕が出てきたのか、笑顔も見えてきました。

さて、「その後更に遊びは広がりを見せる」とになりました。

小さい平均台ではもう満足できなくなっている感じがしたので、「もっと大きい平均台もあるよ?」と声を掛けるとすぐに**「先生、大きいの出して!」**と言いに来ました。

今度は、**「え?そんなに大きいのか?」**という位長くて、高さも倍以上になりました。(但し、歩く幅は同じくらいです)

三歳児のお友達は、今度は僕の手を自分からつかんできて渡っていました。

次に、二歳児は怖いもの知らずなので小さい平均台の時同じように僕の手を持ってスイスイ渡っていくのです。

別な三歳児は一度試みようとなりましたが、怖くて小さい方に戻っていききました。

これらの姿を見て感じたことは、ちゃんと段階を踏まえているということです。

【ふぞく】

三歳児が、怖くて戻ったのには意味があります。

この園児は、過去の経験から、これは落ちたら「痛いぞ」ということを知っているのでしょうか。

このような場合、大人達はすぐに「大丈夫だから」とか「平気だって」と声を掛けますが、僕はそのような場合、自分の意志を尊重します。何度も小さい平均台を渡って自信がついたら自然と大きい方にくることを子ども達が教えてくれたからです。

「小さい子だっ
てしているよ」という声掛けは禁句です。自尊心を傷つけます。小さい子は怖さを知らないだけです。大切なのは今どの段階にいるのかを知ることです。柿原 勝

ふぞく新聞

7月7日(木)

Vol. 3

(Vol.129)

時代が変わっても

最近の子ども達は・・・とか 子ども達は変わった」といった言葉をよく耳にする度に、本当にそうなのかなあ?」「そんなことないと思うけどなあ」と思い続けていました。

どうしてかと言うと、僕が小さい時にワクワクした遊びや面白いと感じたことは、今の子ども達も同じように反応していると思っていたからです。それを証明する出来事が春の親子遠足の時にあったのです。

釧路市動物園の猿山の近くにステージがあります。そのステージにのぼって遊んでいた時のことです。ある三歳児の園児が **先生、見て!**と嬉しそうに言うので見ていると、自力で見事にのぼれたのです。年少さんなのにすごい」とその子を誉めると、ある遊びが始まったのです。

子ども達って不思議で、すごい」とか「下手!」といった言葉は遠くにいてもちゃんと聞いているのです。

何が凄いの?」と聞いて来て、○○君が自分の力だけで、そのステージにのぼれたの」と答えると、**それくらい出来るよ**」と言って五歳児が真似を始めたのです。

さすが五歳児です。難なくのぼれました。さすが年長さん」と言って誉めると、四歳児が **僕も・・・**」と言ってやってきました。

ただ **ステージを自力でのぼる**』という遊びですが、次から次へと **僕も、私も**」と人が集まってきました。

ステージの下の地面が傾斜になっているので、右側になればなるほど難易度は増します。それぞれ課題を決めて挑戦していました。テレビゲームのような高度さもありませんが、夢中になって遊んでいます。

【ふづき】

この遊びの中で大切な点を挙げる とすれば、それを見ている先生や保護者の反応がもしれません。

「こんなことして何になるの?」といった冷めた目で大人達がみれば、「面白くない」と言って子ども達はすぐに止めていたかもしれません。

でもこの時は、僕だけでなく、保護者の方も「すごい」とか「惜しかったね」と言っ てその遊びを温かく応援する雰囲気がありました。

そのような中、子ども達は友達と競い合って、何度も何度も行っていたのだと感じました。僕は、自分が小学校四年生だった頃、川で友達と遠くに石を投げる遊びをしたことを思い出していました。

柿原 勝